|  |
| --- |
|  |
| 2010年度冬学期歴史Ⅱ |
| 月３・本村凌二教授 |
| http://rui4oyo.img.jugem.jp/20080301_456757.jpg |
| **文三20組　笠原** |

去年以前のシケプリ、チャート式世界史、果てはT進のA巻世界史の見取り図なども参照しています。

一応、世界史選択じゃなかった人（出来るだけ）、レジュメ貰い忘れた人にも対応しているつもりです。

☆おわび☆

シケ長（仮）なのにシケプリのアップが遅くなってごめんなさいm(\_ \_)m

誤植や記述がおかしいところがあれば遠慮なく笠原まで教えてください！！

第１講　地中海世界の古層

前４世紀末：**地球の温暖化**

→西アジアで農耕、牧畜の開始（羊や牛の飼育と麦作は双子の関係！）

多産であって欲しいという願いから裸婦像が作られ大地母神、ガイア信仰が生まれる。

【メソポタミア】

　**シュメール人の国家**（民族系統不明。セム系ではない。アジア系？自称「黒髪人」）

　メソポタミア南部における灌漑農法の技術革新

　文字の発明楔形文字による記録（粘土板文書）

　　＊ただし、この時代の識字率は１パーセント未満だった

　都市国家群：英雄伝説と叙事詩『**ギルガメシュ叙事詩**』（都市国家ウルクの王ギルガメシュとその親友エンドゥを中心とする冒険物語）

→アッカド人の侵入（セム系・・・もとは傭兵や雇われ人として流入）

　アッカド王国（前２４－２２世紀）

サルゴン王（在位前2334？－２２７９？）

　（前2400頃シュメール・アッカド地方を統一。サルゴンの開いた王朝はシュメール＝アッカド朝といわれる。シュメール＝アッカド朝の第４代王ナラーム＝シンの治世は特に帝国主義的発展をしたが、この王は生存中から神格化されて「四方世界の王」という称号を用いた。）

　アッカド語（更に古メソポタミアのセム語系言語の総称として）・

・・実用的文書に使用（公式文書にはシュメール語）

　　　シュメール・アッカド地域のセム語系化

【バビロニア王国】（メソポタミアの統一）

バビロン第一王朝第６代王ハンムラビ（B.C.１７９２－１７５０）

「**ハンムラビ法典**」（同害復習原則だが階級の差別がある）

　　　　　←これにハンムラビ法典が記されている

アッカド語『ギルガメシュ叙事詩』など　シュメール文学の復元

数学の高度な知識・天文学(灌漑にも関係あり)の創始期

私経済の繁栄（大農地、動産の私的運営、土地・資産を活用する都市住民）

【エジプト】

　サハラ地域はもともと草原地帯→前４千年期に乾燥化

　→ナイルの増水を利用した灌漑農耕「エジプトはナイルの賜物」byヘロドトス

　→上エジプトのメネス王（ナルメルと同一人物？）が下エジプトを従えてエジプトを

統一？

　・・・**ヒエログリフ**。（官僚制の下で文字を記す**書記**。多くの文字を記す必要性が出てくる）

→アルファベット

〈古王国〉(前２７－２２世紀)

　　　　　　**巨大ピラミッドと太陽神（ラー）信仰**

　ピラミッドの建設：

・奴隷酷使説　・・・？

**・公共事業説**（ナイルの増水の時は農地が使えないため手持ちぶさたな農民に食事と仕事を与える）

〈第１中間期[衰退期]〉（前２２～前２１世紀）

〈中王国時代〉（前２１～前１８世紀）

　特徴：南による北の征服という基本型　　中央集権・官僚機構の整備

　　ナイルの定期的氾濫の宇宙観の影響を受け、人間の生もナイルのように繰り返されて来世に生まれ変わるとする「来世信仰」が普及し、**「死者の書」**（心臓を天秤にかける死者の裁判の章は有名である。秤の目盛りを見つめるのはアヌビス。また、秤には真実の羽根と死者の心臓がそれぞれ乗っており、魂が罪で重いと傾くようになっている。死者が真実を語ればオシリスの治める死後の国「アアル」へ、嘘偽りであればアメミットという魂を食らうワニに似た怪物に食べられるとされるも作られた。From wiki）

〈第２中間期〉[衰退期]（前１８～前１６世紀）

異民族**ヒクソス**（＝外来民族の意）の侵略→元々彼らが持っていた戦車技術を取り入れる

〈新王国時代〉（前１６～前１１世紀）

　　新王国は、帝国主義に近い姿勢をとり、アジア遠征の成果もあって**トトメス３世の時代**(前１５世紀)**最大範図**を実現した。

**アクエンアテンの一神（アテン）教改革**によりアマルナ世界は一時期混乱するが、**ラムセス２世（前１３世紀）が帝国を再**建した。ラムセス２世は**大規模な建築活動**も行った。（ラムセス２世は至高の美しさを持った最愛の妻、ネフェルタリのために今やエジプトの有名観光スポットとなっているアブ・シンべル神殿をたてた。）

　　☆よだん☆

　　　アクエンアテンの妻は絶世の美女ネフェルティティ、そのあいだにうまれた三女のアンケセナーメンは「黄金のマスク」のツタンカーメンと結婚しました。二人の仲むつまじい様子は壁画にも残っていて、ツタンカーメンの棺の中に入っていたヤグルマギクの花束は彼女が入れたものであると言われています。（ここら辺の時代について知りたい人は『天は赤い河のほとり』とか『アトンの娘』読んでね、とか言いたいんだけど・・・ｆ＾＾；古代エジプトについての本ならクリスチャン＝ジャック（フランスの考古学者で古代エジプトをモチーフに様々な物語を書いています）のがおすすめ。）

第２講　オリエントと東地中海世界（前２千年紀～前１千年紀）

オリエント（西アジア）の領土

　メソポタミアとエジプト・・・**「肥沃な三日月地帯」**の中心地帯　　一次文明

　シリアとアナトリア　　・・・・・大河と流域平野に恵まれず　　　　二次文明



この図の赤い部分がいわゆる肥沃な三日月地帯

（実際は今から見ればそんなに肥沃じゃなかったけど、当時としたら肥沃）

**印欧語系諸民族**の出現(前１７世紀頃から)

　ヒッタイト、カッシート？、フルリ？（ヒッタイト人の源流？）、ミタンニ

**カナン人**の小都市国家（部族国家）群　アッカド語キナッフ（という染料の名前）に由来

　西セム語系の土着民

　砂漠の遊牧民アモリ人（山開地に小規模な定住地形成）

　北方から馬をもって南下してきた印欧系の人々

　北方から移動してきたフルリ人（はみ出し者）

**水源地や牧草地を巡る**都市国家間の抗争

干ばつや飢饉の時には転々と流浪（都市国家離脱者＋遊牧民〉

ヒクソス

　東方からエジプトに侵入した「**外来の侵入者**」

　セム系、アーリア人・フルリ人の混成集団

ハビル

　社会階層（移住者、寄留者、非保護者説など。）

　ヘブライ人の源流になる？（ハビルとヘブライって音が似てるし）

　法的保護を持たない不安定な生活

**アルファベット**の開発

　アルファベットは世界史上最大の発明

　原カナン文字・原シナイ文字

　わずか20数文字であらゆる言葉が話せる→**文字の普及**

エジプト新王国におけるアクエンアテン

　一神教崇拝　アマルナ遷都　ユダヤ教はアクエンアテンの影響を受けている？

一神教の成立←神々の沈黙

混迷と抑圧のなかにあるイスラエルの民（旧約聖書の「詩編」、「ヨブ（＝不幸な出来

事が次から次へと降りかかってきたために一度は信仰を捨てそうになった男）記」）

バビロン捕囚とユダヤ教

世界帝国の出現と周辺地域（前一千年紀前半）

騎馬遊牧民　ユーラシア全域



←スキタイ人（神出鬼没と機動性への脅威）

【アッシリア帝国】

　「肥沃な三日月地帯」の真ん中にある都市アッシュル

交易の中継地

新アッシリア（前1千年紀前半）：大型戦車や騎馬軍団の登場

　　馬のはみが金属製に

弾圧の世界帝国；軍事的征服と強制移住政策

　　　　　　　　　　国際交易の拡大→帝国を越える国際商業ネットワークの成立

【四国分立】

・カルディア

・メディア

（ギリシア神話に出てくる子殺しの魔女メディアの子孫が造った国という伝説あり）

・リディア（世界初の貨幣を鋳造した国）

・エジプト

メソポタミア文明の終焉・・・バビロンの栄華に代表される文明の終焉

【アケメネス朝ペルシア】（前550-330年）：パールサ人（印欧系、イラン高原の民）

　寛容の世界帝国（アッシリアは圧政を敷いたためすぐに崩壊）

　　・・・効能と軍役の義務さえ果たせば伝統と宗教を尊重する

　中央集権体制による帝国支配

通信網の整備：「**王の道**」（スサからサルデス）

**サトラプ**（総督）行政の監視

　　　**王の目**（巡察官）と**王の耳**〈密偵〉

　アラム語とアラム文字の採用（国際共通語）・・・諸民族の交流

　フェニキア人　アルファベットの開発　航海技術の発展

　ギリシア人　　アルファベットの普及　普遍的・論理的思考の発端

　ユダヤ人　　「バビロン捕囚」　　　 民族宗教としての一神教

　世界帝国とは・・・

　広大な地域を征服しその領域内に様々な民族を服属させながらも支配の安定性を保つことに成功した強力な覇権国家

第３講　エーゲ文明とミュケナイ文明（前２～１千年紀前半）

1. エーゲ文明

青銅器文明　オリーブとブドウの生産　海洋交易文明

1. ミノア文明の盛衰（５０００年前～３５００年前）

・クノッソス宮殿の伝説的な王ミノス（ミノタウロスを迷宮に閉じ込めた。アリアドネのお父さん）から名前をとってミノア文明とも呼ばれる・・・クレタ文明

明るく開放的な文化



海洋文明　諸文明圏の間の交通経路（ヨーロッパと西アジアをつなぐ）

・クレタ島とテラ島

　　　　テラ島（サントリーニ島）の大爆発による山容の変化（相当な被害を受けた形跡、元々は火山であることを知られていなかったのであろう。）

・サントリーニ島の大爆発（前1420年±１００年）

・クレタ文明の下降期←交易拠点の役割低下←諸文明の衰退

1. 前１５００年頃の気候環境の変動

　・地球的規模における急激な気温の低下があったことが花粉分析のデータから分かる

・年平均気温の２℃以上の低下

　 ・**気候変動→初期古代文明の終息**

　　　　　　　 民族移動（ex.ミケナイ人の侵入）

1. ミュケナイネ社会―線文字Bの解読―

シュリーマン（１８２２－１８９０）　　トロヤ遺跡の発見

エヴァンズ（１８５１－１９４１）　　　クレタ島のクノッソス王宮の発掘

　　　　　　　　　　　　　　粘土板文書　線文字（公開）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　線文字A（公開）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 線文字B（未公開）

　ブレゲン　　　　　　　　　　 ピュロスの発掘

　　　　　　　　　　　　　　 線文字B文書（保存よし）

　ヴェントリス（１９２２－１９５６）　　 解読案（１９５２）

　チャドウィック（1920―）　　　　ヴェントリスの補助

＊解読作業

線文字Aから借りた文字が多い　人間、家畜、物資に関する記録

　文字の種類　約９０　・・・音表文字ではなく音節文字であろう

　語尾変化に富む→印欧語系

　ヴェントリスの解読法　１）頻度　２）状況　３）語尾分析　４）共通する子音「ギリシア語」として解釈

＊線文字B文書の資料的性格

　イ）人員、物資、家畜、土地の管理のための簡潔な王宮の記録

　ロ〉刻まれた都市に関する記入がない→一年限り→王宮の最後の年

《》は資料集の参考箇所です！

　ハ）出生地の問題　クノッソス　ピュロス　ミュケナイ

＊ピュロス王国の社会《P.9　１、２》

　王宮

　　王

　　軍司令官

　　従士団

　　奴隷

　村落（ダーモ）

　　在地の有力者

　　民衆（ダーモ（→デーモス→デモクラシー））

　大工　石工　鍛冶屋　陶工　金細工師　パン屋　牧人

　　　皆農民をやっている中でその中でも大工出来る人は大工・・・といった感じ。

　村落支配を基盤とする萌芽的な**官僚機構**を備えた**貢納王政**《P.9　１》

　オリエント的専制王政に類似している

　後のポリスの国家領域より広大な諸王国の群立状態

第４講　都市国家の成立（前８～６世紀）

ホメロス的（ホメロスが描いた）社会においては

　ミュケナイ時代（詩の対象となる時代）

　暗黒時代（口承詩が育まれた時代）

　ポリス成立初期（ホメロスの生きた時代）

　　→複合されている

　村落共同体における協調的な社会関係（アキレウスの盾には畑を耕す農民を優しく見守るバシレウスの図が描かれていたとか）

　　族長的な**貴族（バシレウス）**《P.18 8》

　　　・・・暗黒時代に王（ワナカ）の権威が低下して勢力をのばす

　　**民衆（ラオイ＝デーモス）**

〈都市国家の成立：**シノイキスモス**（集住）〉《P.14 5》

〈ポリスとエトノス〉

**←ポリス**

　　中心地・・・アクロポリス（城山）　アゴラ（広場）　神殿

ギュムナシオン（トレーニンングジム）

　　田園部・・・村落、農耕地、牧草地、森林

**エトノス**

　　　　　　　　　　　　　　 多集落連合国家（非ポリス国家）　多くの集落が中心地

を持たずに緩い連合を形成している

前８世紀のエーゲ海周辺地域におけるポリスの発生

　　　ギリシア本土のポリス成立圏は、オリエントに近いところにある。（オリエントの先進文明の影響を受けた。）

＊エトノス→ポリスへと変化した

ギリシア人の植民活動《P.22　１１》

　　シチリア、イタリア南部（マグナ・グラキア）、リビア、黒海沿岸地域など

〈ポリスの理念〉

　ポリス＝農耕市民の戦士共同体（農民が戦時のみ武装）

　　共同体内の平等原則

　　外部への閉鎖性（⇔ローマ）

　ポリス市民

　　国家防衛の戦士（武具自弁の財力）・・・**重装歩兵**密集部隊

　　　　　　↓

　　国政の参加者（政治的発言力up）

【スパルタ】

ラコニア一帯における支配の確立

重装歩兵の密集隊形の発展による平民の地位の確立

→**リュクルゴス体制**（長老制など。《P.28　14》）

・・・**アゴーゲー**《P.30　１５》

（伝説上リュクルゴスが教えたことに。教育・軍事訓練＋生活様式）

　スパルティアタイ＝ホモイオイ（平等者）

・・・国政参加

　ペリオイコイ（劣格市民）　　　　　　　　　ラケダイモン人（ドーリア人の自称）

　ヘイロータイ（奴隷か隷属農民）

国制（レトラ）

　長老会（王２人、長老２９人）

　民会（エフォロス５人を選出）

エフォロス・・・対メッセニア戦争が長引くと、二人の王は遠征にかかり切りの身となったので、置かれた代理人。最初は王の下役→権限を拡張

【アテナイ】

　ポリス成立初期

　　族長としての王（バシレウス）の統率

　　王権の分化　バシレウス（祭祀）＋ポレマルコス（軍事）＋アルコン（政治）＋６人の書記

　　　　　　　　歴任者によるアレイオス・パゴス会議（貴族の集団指導）

**ドラコンの国制**（後世の捏造かも）　《P.33　１７》

貴族と平民の対立→ドラコン立法（B.C.６２４）　アテネ最古の成文法

　　**血讐の禁止**→法を背景とする公権力の規制

**ソロンの改革**（前６世紀初め）《P.35　１９》

　・**債務奴隷の禁止**（借財農民の負担帳消し）

**・財産級制度**（ティモクラティア）

・・・**門地より財力**(市民義務履行能力)に応じた政治的権利

　　　中小農民の救済及び市民身分（国家防衛の戦士＋国政の参加者）の確立

　貴族と平民の抗争

　　平民層を従えた貴族間の抗争

**僭主制**

　　平民層の不満→武力による一種の独裁政（前６世紀半ば）・・・反ポリス的

　　ペイシストラトス：聡明な独裁者　平穏と国力の充実

　　　反ポリス的（武器の没収、1/10税、一族を要職に）

　　　　・・・だが、

　　　民主的（農民の保護育成、旧来の貴族支配の打破）

　コリント陶器　　→　 **アッティカ陶器**

アッティカ貨幣鋳造の本格化（ラウレイオン銀山の発掘）

第５講　古典期ギリシア（前５・４世紀）

〈賢明な僭主と愚劣な僭主〉

　前６世紀中葉　ペイシストラトスの死→兄**ヒッピアス**と弟ヒッパルコス

　　　　　　　　　homo的な恋愛関係のもつれから（？）ヒッパルコス暗殺

　　　　　　　　　　→その後猜疑心に苛まれたヒッピアスの暴政

　　　　　　　　　　→暗殺者の功績をたたえる像が僭主制崩壊後に出来た

　ヒッピアスは亡命

〈**クレイステネス**の改革（B.C.508）〉

　区（**demos**）の創設：１０部族制（共同体の基盤を血縁から地縁へ）

→アテナイ民主制の完成の前提となる「制度的」枠組み！

兵士団、各部族から５０人ずつ選出して行われた**500人評議会**、

**オストラシズム（陶片追放）**

・・・民主政を守るため、僭主になる可能性のありそうな人の名前を陶片にかいて一定の票が個人に集まるとその人が追放となる仕組み。結局は、自分たちと意見が違うグループのリーダーを追

 　　　　　　　　　　 いおとす手段に使われるようになった。

〈**ペルシア戦争：**オリエントとギリシア〉（「歴史の父」ヘロドトスが『歴史』に記述する）

　背景：アケメネス朝ペルシアがイオニア植民地（ギリシア人住む）を圧迫

　　　　→アテナイに援軍要請

　前４９０　第一回ペルシア戦争　**マラトンの戦い**（マラソンの語源）

　　　　アテナイ・プラタイア軍がアケメネス朝ペルシアを破る

　　　　　→勝利の知らせをマラトンからアテナイまでの長距離をダッシュで伝えにきた兵士（知らせ終わった直後に力尽きて亡くなったそうですが）がいた（？）

　　前480　第二回ペルシア戦争　**サラミスの海戦**

　　　　またまたアテナイの方が勝利

 テミストクレスの海軍主義でペルシア軍撃破

　　　　 無産市民も軍艦の漕ぎ手として参戦→**下層市民の国政参加**

〈アテナイ民主政〉

　前４７７　**デロス同盟**の結成

　　**ペリクレス**（クレイステネスの姪の子）時代(前４６２－４２９年)

　　　内では民主主義　外では帝国主義　アテナイはギリシア随一の富裕国となる

　前454　デロス同盟金庫のアテナイ移転　→「アテナイ帝国」化

　前４５１　**ペリクレスの市民権法→市民身分の閉鎖化**（⇔ローマ）

　　　　　　　**両親ともアテナイ人でないと市民として認められない**

　前４３２　パルテノン神殿の完成（当時デロス同盟やアテナイ帝国の国庫としても使われる）

〈**ペロポネソス戦争**〉（トゥキディデスが『戦史』で記述）

　・アテナイの凋落　スパルタの覇権　民主制アテナイVS貴族政スパルタ

　・籠城作戦・・ペリクレスが流行病で亡くなったのがアテナイにとっての最大の不幸

　・シチリア遠征の失敗《P.69　３８》・・・反対派が長期の遠征は辛いといって支援しなかった

〈ポリスの変質〉

　・前４世紀前半におけるスパルタ勢力とテーベ勢力の競合

　・諸勢力・ポリスの国力が弱体化する

　・ペルシアの影響力が増大→**大王の和約**によりペルシアの侵入を防ぐ

　・**傭兵の一般化→市民皆兵原則の崩壊**

〈古典期の文化〉

　悲劇と喜劇（富裕市民による公共奉仕）

　　「悲劇は平凡な人間より優れたものを求めるが、喜劇は愚劣なものを好む」

　　　・・・悲劇の方が好まれる

　　三大悲劇詩人；アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス

　　　　喜劇詩人：アリストファネス

　哲学と科学

　　・イオニア自然哲学

（タレス「万物の源は水」　ヘラクレイトス「パンタ・レイ＝万物流転」など）

　　・**ソフィスト**（←ソフィア）諸学特に論理学と修辞学

　　　○民主的な議論　・・・だが実際は・・・×**主観主義**による公衆道徳の崩壊

　　　ソクラテス、プラトン、アリストテレス

　　　数学(ピタゴラス)　医学（ヒポクラテス）　歴史学（ヘロドトス、トゥキディデス）

古典期（クラシック）の美術　動きと安定を結びあわせたコントラポスト（＝体重の大部分vを片脚にかけて立っている人を描いた[視覚芸術](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A6%96%E8%A6%9A%E8%8A%B8%E8%A1%93%22%20%5Co%20%22%E8%A6%96%E8%A6%9A%E8%8A%B8%E8%A1%93)）

第６講　地中海世界とヘレニズム（前４－１世紀）

都市国家ポリス→強大なる覇権による領域支配（世界帝国の継承）

一人の人間の野望が作り上げた世界（ヘレニズム）であるのか？

〈マケドニア王国〉

　・ドーリス系王朝のエトノス国家　農耕と牧畜

　・**フィリッポス２世**による軍事力強化（騎馬軍団の充実・長槍サリッサの威力）

　　《P.84　４８》

　・**カイロネイアの戦い**（前３３８年）　アテナイ・テーベ連合軍を撃破

　・**コリントス同盟結成**（前３３７年）　 ギリシア諸ポリスを支配（考古学的には実態不明・中心とするポリス無し）

〈**アレクサンドロス大王**（フィリッポス２世の息子）の東方遠征〉

　経路については省略

ギリシア世界とオリエント世界の融合（？）

　　・オリエントのヘレニズム化orギリシアのオリエント化

 　ペルシアの先進文化を取り入れるため**混血促進**

　　　（大王自身ペルシアの王女を娶る）

　　・ギリシア人の集団移住

　　・**専制君主制＝帝国支配の継承**

　　　ギリシア人を中枢にしたペルシア人官僚の統治体制

　　　軍の再編：マケドニア人とペルシア人の混成部隊

　　・**コイネー（共通語）を公用語**とする

　　・ヘレネス（ギリシア人）の文化を基盤とする

ディアドコイ（後継者）の争い（約40年間）

〈ヘレニズム諸国家（勢力均衡が比較的平穏な状況をつくっていた）〉

　【セレウコス朝シリア】（前312－前６３年）首都セレウキア→アンティオキア

　　アフガニスタンーシリアにかけて。　推定人口３０００万人

　　　→自立　・ペルガモン王国（前２６２-前１３３年）ローマと結ぶ（図書館・ゼウス祭壇）

　　　　　　　・バクトリア王国(前２５５－１３９年)大夏→クシャーナ朝に滅ぼされる

　　　　　　　・パルティア王国（前２４８ごろー後２２６年）ペルシア人勢力の独立

　【アンティゴノス朝マケドニア】（前306－前168年）

　　ギリシア的統治体制による支配　ローマとのピュドナの戦いで滅亡

　【プトレマイオス朝エジプト】（前304―前30年）　首都アレキサンドリア

　　首都アレクサンドリアの繁栄（商業・文化）（この王朝の頃有名な学堂ムセイオンも建てられた。）

　　産業の統制　ヘレニズム文化の集大成

　　（カエサルとアントニウス（オクタヴィアヌスの姉の夫）の恋人で、美貌と教養で有名であった女王クレオパトラはこの王朝最後の王。オクタヴィアヌスにこの王朝は滅ぼされたがその際エジプト女王としての最後の誇りを守るために毒蛇に身を噛ませて自殺したと言われている。）

〈ギリシア文化を共通項とする地中海世界・文明の成立〉

　・ヘレニズム化の助走路としてのオリエント文明（ヘラス文明を取り込む）

　・ギリシア語（コイネー）の普及とアラム語の並存

　　多様な言語によるオリエントの学問・思想がギリシア語で表現される

　　普遍的な言語の浸透は論理学・数学・天文学・医学といった普遍的な学問の発展に結びついた。

　・ギリシア人の都市「アレキサンドリア」が各地に建設される

　　もはや都市国家＝ポリスではない

　　交易ネットワークの結節点となる

　　広範囲の覇権

　・空前絶後の宗教混合（シンクレティズム）

　　ギリシア宗教の変質（デュオニュソス祭礼etc）

　　　・・・オリエントやエジプトの宗教の要素が混ざる

　　オリエント系の宗教

　　　ex.イシス（エジプトの宗教において最高神オシリスの妹かつ妻にして最高の女神）

　　　　　→マリア信仰の源流

運命は決定されているのではなく宗教によって未来を変えられると考える

（宗教に運命の克服より救済を求めるように）

　**コスモポリタニズム**（世界市民としての自覚）と個人意識

　　　人間の生き方を追求し、心の平安を求める個人意識が芽生え、ストア派とエピクロス派の哲学が生まれた



〈ヘレニズム美術〉

　本物そっくりの写実性と恐るべき技巧・・・多くの人に分からせる

〈ヘレニズムのまとめ〉《P.105》

もしアレクサンドロスという個性がなければヘレニズム世界はありえたか？

「否」

ギリシアの普遍性への信仰の体現者として傑出

ヘレニズムは成立したがかなり縮小したものであったであろう

第７講　カルタゴ・ギリシア・ローマ

1. 地中海世界の先住民族およびカルタゴ人、ギリシア人、ローマ人

地中海世界先住の地中海人種（**母権制社会**）

　ベルベル人　イベレス人（バスク人？）　シカニア人　エリュモス人　シケリア人

　サルドイ人

　　 **エトルリア人　ギリシア人　カルタゴ人（←フェニキア人）**

　前2000年期　地球寒冷化が進む中世界中で印欧語系民族の大移動が起こる

　　印欧語系民族（**父権制社会**）

　　　ケルト人　古イタリア人（ラテン人→**ローマ人**）

1. オリエント（先進文明世界）の脅威

ペルシアとギリシア　ペルシア戦争→前449年　カリアスの和約（終結）

アレクサンドロスの反撃　オリエントのヘレニズム化（第６講参照）

　地中海の交易ネットワーク→海域世界の形成→**制海権を巡る争い**

**ハンニバル**の挑戦（植民市カルタゴのローマに対する反乱。一時はローマ陥落間近まで行ったが結局失敗に終わった）→復讐or海洋帝国の形成？

1. カルタゴ史

そもそもカルタゴの叙述は可能か？

　ディオドロス（前1世紀）＋ユスティヌス（３世紀）は焦点外の記述

　クラウディウス帝の『カルタゴ史』（ギリシア語）は現存しない

古い植民地（ケルクアンなど）もあったのになぜカルタゴが卓越？

　商業上の要衝地＋後背地の豊かさ

　　（カルタゴは軍艦で海へ繰り出していく。都は商港と軍港に分かれていた。）

　多様な社会層と強力な貴族の支配層（女王ディドによる建国伝説）

☆よだん☆

ヴェルギリウスの『アエネイス』によるとディドはカルタゴの女王であり、そこを訪れた英雄アエネイスと愛し合います。しかし彼は大神ゼウスによって課せられた仕事があった

　ためにそこを離れなくてはならず、別れの日ディドは彼の船を見送りながら業火の中に身を投じたと伝えられています。

　　カルタゴの建国伝説によると彼女は共同統治者であった兄に財産

と王位を目当てに夫を殺され、出国せざるをえなくなりアフリカに辿り着きました。その土地の王に土地の分与を求めたところ「一頭の牝牛の皮で覆えるところなら良い」といわれ、その皮を細く裂いて囲んだ土地を得たといいます。（その土地が後のカルタゴ）その賢さに感嘆した王が自分との結婚を求めたところ亡き夫に貞節を誓っていた彼女は火葬の炎の中に自ら飛び込んで命をたったとか・・・



第８講　ローマ共和制

1. エトルリア人とローマ人

前７５３年？（七五三！）ラテン系のロムルス（→ローマ）とレムスの建国伝説

オオカミに育てられている双子の有名な像ですね。《P.145　７１》

・エトルリア人はイタリア半島（中央～北部）の先住民族であった。ヨーロッパ初期鉄器時代と重なる時期に伝統的な**ヴィラノヴァ文化**を持っていたが、この文化は**オリエントの影響を受けて**変化し、彼らは自らを**ラセンナ**と呼ぶようになった。

・先進文化を持っていたエトルリア人は海上交易で富裕化し、都市国家を建設して勢力を拡大していき、（かのポンペイ遺跡のポンペイにもエトルリア人が来ていた形跡が。）やがてローマの支配者となった。王政期ローマの５・６・７代（ラスト３代）の王はエトルリア人であったとされる。

・城壁建造《P.141ローマ市街図》城壁は土塁のような物であった。

**・クラシス・ケントゥリア制**

ケントゥリアを5つの階級クラシスに分け、軍隊を編成し、選挙に際しては1つのケントゥリアごとに１票を投じる制度。財産に応じて兵役や参政権を決める。　　　　　　　　　　上位のケントゥリアほど人数が小さい単位（本来ケントゥリアは１００という意味。下位だと１０００とか）同じ一票でも上位のケントゥリアほど重い意味があった。

**・トリブス区分**

戸口調査による市民登録。

「分割して統治せよ」《P.153　７６》

ラテン人戦争で勝利を収めたローマはラティウムとカンパニアに割拠する都市国家を自らの覇権の下に統合する。その際ローマは一都市国家としてこれら諸都市といずれも個別的な条約を結び、それぞれの待遇を異にして団結、反抗を防ぎ、軍事・外交の宗主権を握って諸都市を支配した。

　このような**分割統治政策**によってローマはイタリア全土にわたる支配権を獲得したのである。

・領域拡大と市民団の増大によりラティウム（イタリア半島中部の平野）でローマの優越が実現した。ローマ人はエトルリア人の王を追放し、専制政治の対極である共和制を成立させる。

1. 都市国家から世界帝国へ

・イタリア半島の征服

西地中海における覇権←ポエニ戦争

東地中海における覇権←マケドニア・ギリシアの征服

前146年の地中海世界帝国（カルタゴの破壊、マケドニア属州化）

・ローマの国制

**S.P.Q.R**（必ず覚えること！Senatus Populusque Romanus：ローマの元老院および民衆の略。現在もローマのマンホールにたくさん書かれている。ローマ人は自らをこう呼んだ。）

CIvitas（市民団）＝Res Publica（国家）

つまり、ローマ全体の主権者を表したことで、**ローマ共和制のことも指す**。

ローマの政体に貴族と平民２つの身分があったことを示す。

政体循環論＜混合政体論（貴族政＋民主制＋独裁制）

身分闘争（平民VS貴族）・・・貴族による法と政治の独占

→平民有力者が政治参加を達成

→十二表法と身分制度により新貴族（ノビレス）の台頭

―元老院の構成員となる

・**公民権政策の開放性**

ローマは征服した住民に対して、相手とローマとの関係に応じて個別にローマ市民権や他の様々な権利を認めた。ローマの公民権政策は**開放性**を持っていたわけである。両親がアテナイ市民である者にのみ市民権が与えられたアテナイのような**ギリシア・ポリスの閉鎖性**《P.51　２９》**と比較**すればそのことがはっきりとする。分割統治の項も参照。

・ローマ人の宗教

保守主義（厳格な手続き、清廉潔白、神々への誓約の尊重）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ローマ人のreligio(慎み) | 祭儀宗教 | 国家及び共同体の鎮護 |
| ギリシア人のtheoria（観） | 祝祭宗教（カーニバル的） | 個人救済 |

「征服されたギリシアが野蛮な征服者を虜にした。」ホラティウス

1. 共和政ファシズム国家

・現代ファシズム

1. 共同体意識　②社会改革　③指導者原理　④生存権（生命線）

④例えば三国同盟の国：欧米列強の中で遅れていた。→自分たちの生き残りを図るためにファシズム

・古代ファシズム

1. 農耕市民の戦士共同体
2. 地と戦利品（下層民も植民地の獲得など、

自分の土地を手にすることができる）

③武勲という名誉←権威(auctoritas)

エトルリア人を駆逐してS.P.Q.Rを作ったとき、（スキピオの時もそう）一人の個人を英雄として祭り上げることは嫌がる。しかし武勲をあげた人はやはり尊重された。（名誉を重んじるローマ人）「政治は権力においてよりも権威をもって行え」

　　④先手防衛論

　周辺諸勢力の制圧

ラテン人、サビニ人、アクエイー人、ヴォルスキー人、エトリルリア人

**ケルト人の侵入**（連戦連勝者の不名誉なる屈辱！）

　Vae victis（敗者よ、黙れ！）と言われた。→カミルス「ローマの第二の創建者」

[紀元前396年](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B4%80%E5%85%83%E5%89%8D396%E5%B9%B4)、カミルスはローマ軍を率いてローマから程近い[ウェイイ](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%82%A7%E3%82%A4%E3%82%A4)という[エトルリア人](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%88%E3%83%AB%E3%83%AA%E3%82%A2%E4%BA%BA)の町を攻略した。ローマ市民たちはローマよりも都市設備の整ったウェイイに首都を遷そうと言ったが、カミルスは「ローマを捨てることはローマの神々を捨てることであり、ローマを離れれば我々はローマ市民ではなくなる」と言って真っ向からこれに反対した。そこで市民たちはカミルスにあらぬ罪状をかけて追放しようとした。

これを知ったカミルスは友人たちに相談したが、友人たちは「君に課せられる罰金を集める手伝いは出来そうだが、追放に反対する票を集めることは出来そうにない」と言った。カミルスは指揮官としては非常に有能であったが、強引で物事をはっきり言う男であった。ウェイイ攻略戦の際にはローマの有権者たちからなる軍団にローマ軍初と言われる冬営を強いており、ウェイイ攻略戦による凱旋式は派手に行いすぎ、別の戦役では兵士たちが略奪をしたがっている時に無血開城させてしまうなど、市民からの人気が非常に低かったのである。当時、自らローマを去った人間に対しては、その罪を問わないとする風習があったので、カミルスはローマを去った。　しかし[紀元前387年](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B4%80%E5%85%83%E5%89%8D387%E5%B9%B4)、カミルスがローマを去ってすぐに、ローマは[ケルト人](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B1%E3%83%AB%E3%83%88%E4%BA%BA)の襲来をうけて滅亡寸前に追い込まれた。ローマ市民たちはこれを神の怒りであると考え、カミルスの言った通りになったことを後悔した。カミルスはケルト襲来を受けて散り散りになったローマ市民を取りまとめローマに向かって進軍する。 そのころローマの一角に立てこもった市民たちはケルト人の王に身代金と引き換えに兵を撤退させるように交渉をしていた。ケルト人は秤に細工してより儲けようと図ったが、それに気がついたローマ人がそれを指摘すると「**敗者よ黙れ。**」と答えた。そこに駆けつけたカミルスは「ローマは金ではなく、剣でお返しする」と告げて戦闘が開始され、ケルト人を散々に打ち破った。この時のカミルスの言葉はその後ローマの国防の指針となり、以後[ドミティアヌス帝](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%83%9F%E3%83%86%E3%82%A3%E3%82%A2%E3%83%8C%E3%82%B9)の時代に至るまでの約400年間、ローマが身代金と引き換えに捕虜の解放を要求した例はない。その後カミルスは[独裁官](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8B%AC%E8%A3%81%E5%AE%98%22%20%5Co%20%22%E7%8B%AC%E8%A3%81%E5%AE%98)に任命されてローマ復興を任された。　ローマがケルト人の襲来を受けて荒廃すると、ローマを中心とする[ラテン同盟](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%A9%E3%83%86%E3%83%B3%E5%90%8C%E7%9B%9F&action=edit&redlink=1)の結束にもひびが入り、各地でローマに叛旗を翻す部族・都市国家が続出したが、カミルスは20年かけて周囲の反乱を全て鎮定し、4度もの[凱旋式](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%87%B1%E6%97%8B%E5%BC%8F&action=edit&redlink=1" \o "凱旋式（存在しないページ）)を挙げる名誉をうけた。（from　Wiki・笠原編）

３度のサムニウム戦争

・「父祖の遺風」mos maiorum

　父祖の物語を刻み込む「ローマ人は敗北を決して忘れない」

国家への自負

下層民までが国家というものを自負するようになったのはローマが初めて？

カンネーの戦い・・・ローマ軍が必ず勝つと思われていたのに大敗北。しかし、ローマ軍を率いた将軍は社会的制裁を与えられることなく戻ってきた。→「次の戦争で必ず雪辱をすすぐ！」という思い＋リベンジのチャンスを与える。＝国家のために働く。

**国家主義＋軍国主義**

「ローマ国家は古来の遺風と人からなる」

「ローマ人は平穏なときより困難なときの方が信頼できる」

《P.134　７７》

1. 共和政社会の動揺

　ローマは**都市国家、すなわち農耕市民の戦士共同体**として出発したが、**征服戦争と支配領域の拡大に伴って都市国家的な国制が限界を迎え**、ローマは変容していった。国防を担った農民層が没落して耕作を放棄した結果、富裕者による**土地所有の集積が進み、奴隷労働力を使った大土地経営（奴隷制ラティフンディア）**が行われるようになった。農耕市民＝戦士の図式はもはや成立しなくなったうえ、格差が拡大した。このような変容の中で共和政社会は動揺し、ローマは軍国主義的な色彩を強めていった。

Roman Imperialismをめぐって

先手防衛論＋騎士身分層の台頭＋平民の不満をそらす＋群集心理

・**グラックス兄弟の改革**《P.164 82》

 「ティベリウスがヌマンティアへ行くときエトルリアを旅していたとき、そのときに人影がまばらで、耕作や放牧をしているのは外国から連れてこられた蛮族出の奴隷であるのを見て、その時初めて自分たちにとり多くの不幸の始まりとなる政策を考えついたのだ」《P.164 82 A》（Bはグラックス兄弟の母コルネリアの手紙。母の悲痛な思いが綴られている。）

土地の再分配（土地を失った無産市民にもう一度自作農に戻ってもらおうとした。 →法律的には全くおかしくない。むしろそれまで**リキニウスセクスティウス法**（・・・誰も５００ユゲラ以上の土地を占有してはならぬこと・・・《P.151 75》）が守られていなかったことがおかしい。

　国防力の再建←→中小土地所有者＝自作農の増大

党派（factio）の争い　**閥族派**と**平民派**

　　**マリウス**（兵制改革を成功させ、平民派を率いる）

VS**スッラ**（ローマ最大の大金持ちといわれた。閥族派を率いる）

有力武将の台頭と元老院支配の凋落

広大な支配領域の統治システム（共和政体制の限界）

権威ある者（武勲：ポンペイウス　財産：クラッスス　度量：カエサル）

1. カエサルという経験

「あの若造の中には何人ものマリウスがいる」（スッラ）

「一生かかって修辞法を学んでも、彼に近づくことすらできない」（キケロ）

とらえられたとき海賊に向かって「必ず仕返ししてやる」（伝承→自己宣伝・冷徹）

「兵士を人柄や身分からではなく、ただ勇気からのみで判断した」（スエトニウス）

「どちらの側にも与しない人を私は味方とみなす」（伝：スエトニウス）

「借金の返済を助けてくれ」（同上）

「執念深い怨恨など抱いたことがなく、抱いても喜んで捨てた」（スエトニウス）

５年間の間に多くの改革を行ったが共和政の伝統があるローマではカエサルが独裁者になることを恐れられカエサルは暗殺された。（「ブルータスよ、おまえもか！」）

第９講　地中海世界帝国の形成（前１～後１世紀）

元首（皇帝）兼職の成立

**アウグストゥス**（カエサルの甥、姉のオクタヴィアはアントニウスの妻）による国家の再建（皇帝権力の成立）

　・「**元首**（プリンケプス）」の称号は「市民の中の第一人者」を示しているに過ぎない

 ・『**神皇アウグストゥス業績録**』《P.7＆180　８９》

　　　「終身にわたるコンスル職もまた余に申し出があったが、余はこれを受理しなかった。」

→独裁者とは思われないように政策的配慮

　　市民共同体における個人支配の正当化

　　　**形式上は共和制**を保ち、**公職の兼任**により、権力を得ているが、**皇帝としての権威・声望を集めている**点で、**実質的には元首制**ということができる。つまり、この時期の皇帝という地位は**権力(potestas) は否定するが、権威(auctoritas) は強調**している。

　　ｃｆ. アウグストゥスの肩書き（後14年）

　　　　　「最高司令官・カエサル・神の子・アウグストゥス・執政官13回・最高司令官

　　　　　　の歓呼20回・護民官職権行使37年目・国夫」

☆よだん☆　インペラトール→インペリアル、エンペラー

　　　　　　カエサル→カイザー

　【ユリウス・クラディウス家の皇帝たち】

　　**アウグストゥス**

**後継者としてゲルマニクスへの期待**

**ティベリウス**

暴君。アウグストゥスの養子、**ゲルマニクスの不可解な死**

　　　晩年はカプリ島に引きこもる

**カリグラ**

民衆の期待に応えて善政（政治犯の釈放、大盤振る舞いなど）→病気（精神疾患？）になったせいか暴君に。大盤振る舞いのせいで財政危機にもなった。**ゲルマニクスの実子**（幼い頃軍隊の靴を履いていたことからカリグラというあだ名に）

**クラディウス**

ゲルマニクスほど見栄えは良くない、どもり（？）でも皇帝としてはそこそこ良かった。**ゲルマニクスの弟**。美貌の姪アグリッピナと結婚（アグリッピナはクラディウスをおとして自分の息子ネロを皇帝にしたかった？アグリッピナはゲルマニクスの娘）おそらくアグリッピナに暗殺された。

**ネロ**

　　　　**ゲルマニクスの娘の子**死ぬときに「この世からなんと偉大な芸術家が死んでしまうことか」といったほど芸術家気取りであった。最初は名君→暴君

☆よだん☆

　　　火山灰に埋もれた古代都市ポンペイの貴族出身であったサビナ・ポッパエアは夫がネロの部下であったがその美貌と野心によってネロの愛人となり皇后に上り詰めた。　　　夫をそそのかして姑アグリッピナを暗殺させたものの、そののち妊娠中に夫の浮気に関するふとした口論からネロにお腹を蹴られて死んでしまう。ポンペイには「サビナ、いつまでも花のように。若く美しく、娘のままでいておくれ」という彼女に関する落書きが残っている。

　　＊ユリウス家・クラウディウス家の血統が途絶える　→　帝位をめぐる混乱

〈ユリウス・クラウディウス家の皇帝たちをもう一度整理！〉

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| **肖像** | **名称** | **即位背景** | **没年と死因** |
| Statue-Augustus.jpg | [**アウグストゥス**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%A6%E3%82%B0%E3%82%B9%E3%83%88%E3%82%A5%E3%82%B9)IMPERATOR CAESAR **AVGVSTVS** | [プレブス](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%97%E3%83%AC%E3%83%96%E3%82%B9)階級出身（[オクタヴィウス家](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%AA%E3%82%AF%E3%82%BF%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%A6%E3%82%B9%E5%AE%B6&action=edit&redlink=1)）。[ユリウス・カエサル](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A6%E3%83%AA%E3%82%A6%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%AB%E3%82%A8%E3%82%B5%E3%83%AB)の大甥（姉の孫）という縁で継承者の途絶えた[ユリウス氏族](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A6%E3%83%AA%E3%82%A6%E3%82%B9%E6%B0%8F%E6%97%8F)[カエサル家](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%A8%E3%82%B5%E3%83%AB%E5%AE%B6)を継ぐ。最初のローマ皇帝として、[元首政](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%97%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%AD%E3%83%91%E3%83%88%E3%82%A5%E3%82%B9)を確立。 | [14年](http://ja.wikipedia.org/wiki/14%E5%B9%B4)[8月19日](http://ja.wikipedia.org/wiki/8%E6%9C%8819%E6%97%A5)自然死 |
| Tiberius palermo.jpg | [**ティベリウス**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%99%E3%83%AA%E3%82%A6%E3%82%B9)**TIBERIVS** CAESAR AVGVSTVS | [クラウディウス氏族](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%A6%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A6%E3%82%B9%E6%B0%8F%E6%97%8F)出身。アウグストゥスの後妻リウィアの連れ子で、継父の大甥[ゲルマニクス](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B2%E3%83%AB%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%82%AF%E3%82%B9)の後見人として即位。 | 紀元後37年3月16日暗殺説あり |
| Gaius Caesar Caligula.jpg | [**カリグラ**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%AA%E3%82%B0%E3%83%A9)**GAIVS** CAESAR AVGVSTVS GERMANICVS | クラウディウス氏族出身。ゲルマニクスの息子。 | 41年1月24日近衛隊による暗殺 |
| Claudius Pio-Clementino Inv243.jpg | [**クラウディウス**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%A6%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A6%E3%82%B9)TIBERIVS **CLAVDIVS** CAESAR AVGVSTVS GERMANICVS | クラウディウス氏族出身。ゲルマニクスの弟でカリグラの叔父。姪である[小アグリッピナ](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E3%82%A2%E3%82%B0%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%94%E3%83%8A)（カリグラの妹）と再婚。 | [54年](http://ja.wikipedia.org/wiki/54%E5%B9%B4)[10月13日](http://ja.wikipedia.org/wiki/10%E6%9C%8813%E6%97%A5)小アグリッピナによる暗殺 |
| Nero 1.JPG | [**ネロ**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8D%E3%83%AD)**NERO** CLAVDIVS CAESAR AVGVSTVS GERMANICVS | クラウディウス氏族出身、継父の養子となる前は[ドミティウス氏族](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%89%E3%83%9F%E3%83%86%E3%82%A3%E3%82%A6%E3%82%B9%E6%B0%8F%E6%97%8F&action=edit&redlink=1)に属した。カリグラの妹である小アグリッピナの子で、クラウディウスの養子。 | [68年](http://ja.wikipedia.org/wiki/68%E5%B9%B4)[6月11日](http://ja.wikipedia.org/wiki/6%E6%9C%8811%E6%97%A5)自害 |

【理想の為政者：**ゲルマニクス**】

　ティベリウス家の養子であり卜鳥官、アウグストゥス祭司、歓呼、執政官を歴任する。彼はゲルマニア遠征軍総司令官として輝かしい戦績をあげ、またティベリウス帝の忠実な部下、孝行息子のイメージも手伝って絶大な人気を得た。

　A.D.18　属州アシア訪問：このとき歓迎を受けた様子が多数の貨幣や碑文から分かる

　 19　エジプトを訪問し名所旧跡を視察→パピルス文書「**ゲルマニクス布告**」

→謎の死　マラリア？毒殺？（ティベリウスの妬み？）

→人々の慟哭と哀悼

　ゲルマニクスはアレクサンダーに匹敵する英雄とも第一市民（元首）にふさわしい

人物とも言われた。これは理想的な為政者への期待と理想像の現れといえる。

【フラウィウス家の皇帝たち】

**ウェスパシアヌス**　ネロが破壊した帝国の秩序回復・財政再建

　　　　　　　　　　質素な王　唯一やった派手なこと：**コロッセオ建設**

ティトゥス　　　　名君？彼の時代に**ポンペイ埋没**

　ドミティアヌス　　行政・軍事手腕　元老院議員迫害→暗殺

元老院とうまくやった皇帝（ex.五賢帝）＝名君

第１０講　「ローマの平和」と地中海世界の融和

　　　**地中海世界**・・・大きく分けて３つの文化圏にまたがる

　　**オリエント世界、ギリシア世界、ラテン世界**(ローマ人など)

　　　　　　　　　↓統合

　　**ローマ帝国（地中海世界帝国）**

　　　　　　　　　↓解体

　　**イスラム・アラブ世界、ビザンツ・スラブ世界、ラテン・ゲルマン世界**

古代地中海世界の近代性

　　穏やかな内海＆島多い、**海賊の一掃**（ポンペイウス）

→安全性の確保→今の（EU諸国よりも広い）諸地域が海を通して結びつく。

→**近代の海域世界（大交易時代）へ**

　　日常生活物資の海上交易　小麦、ワイン

　　　物資・情報の交換→文化交流→文明融和の基盤

ｃf.海のシルクロードでは高価な品物をやりとり

文明融和の核としての皇帝

　賢帝とは？・・・**元老院の意見を尊重**した皇帝（ｃｆ.ネロは意外と民衆に人気があったが元老院を軽視＝暴君と呼ばれる）形式的には元老院の承認要

　　アウグストゥス　共和政体のなかの元首支配の確立

　　ウェスパシアヌス　帝国の安定　寛容　ユーモア　質素

五賢帝（**人類史上最も至福の時代**　byギボン）

　　５人の愚帝後・・・

　　[**ネルウァ**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8D%E3%83%AB%E3%82%A6%E3%82%A1)（96-98年）　元老院貴族として圧政からの解放感

　　　　　　　　　　　 高齢になってからの皇帝→養子をすでに指名

　　**トラヤヌス**（98-117年）威厳がある　温情主義（扶養資金制度《P.203　１００》）

軍事功績（ダキア地方）



フォロロマーノあたりにあるトラヤヌス帝の記念柱・・・ダキア戦争の様子が刻まれている。イタリアの小学校では社会科見学みたいなもので訪れる。

　**ハドリアヌス**(117-138年)

国境の警備

　　 治世の半分以上を**属州の巡回**に費やす(それまでの皇帝は元老院を尊重したが民衆をなおざりにしているところがあった。それを是正)

・・・属州の貴族達がハドリアヌスのために建築

　　　　　建築ブーム→ハドリアヌス・ルネサンス

　　　　　属州各地の神々をパンテオンで祀る（ローマは自らの宗教を押しつけない）

　ケルト人の侵入から領土を守るため現在のイギリスに築かれた「ハドリアヌスの長城」

サンタンジェロ城（有名なアリア「歌に生き恋に生き」を歌う、オペラ「トスカ」の主人公トスカはこの城の上から身を投げた！）

・・・もともとはハドリアヌスのお墓

**アントニヌス・ピウス**（１３８－１６１年）　野心のなさ、誠実と正直

「歴史のない皇帝」＝平和

**マルクス・アウレリウス**（１６１－１８０年）　哲人皇帝　苦境（疫病流行、ゲルマン人の侵入）を誠実に生き抜く

〈五賢帝をもう一度整理！〉

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| **肖像** | **名称** | **即位背景** | **没年と死因** |
| Nerva Tivoli Massimo.jpg | [**ネルウァ**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8D%E3%83%AB%E3%82%A6%E3%82%A1)MARCVS COCCIEVS **NERVA** CAESAR AVGVSTVS,  | [コッケイウス氏族](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%B3%E3%83%83%E3%82%B1%E3%82%A4%E3%82%A6%E3%82%B9%E6%B0%8F%E6%97%8F&action=edit&redlink=1)出身。[フラウィウス朝](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%82%A6%E3%82%B9%E6%9C%9D)断絶後、元老院により推挙される。 | [98年](http://ja.wikipedia.org/wiki/98%E5%B9%B4)[1月27日](http://ja.wikipedia.org/wiki/1%E6%9C%8827%E6%97%A5)自然死 |
| Traianus Glyptothek Munich 336.jpg | [**トラヤヌス**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%A4%E3%83%8C%E3%82%B9)CAESAR MARCVS VLPIVS NERVA **TRAIANVS** AVGVSTVS | [ウルピウス氏族](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%A6%E3%83%AB%E3%83%94%E3%82%A6%E3%82%B9%E6%B0%8F%E6%97%8F&action=edit&redlink=1)出身。老齢で嫡男のいないネルウァに養子として迎えられる。 | [117年](http://ja.wikipedia.org/wiki/117%E5%B9%B4)[8月9日](http://ja.wikipedia.org/wiki/8%E6%9C%889%E6%97%A5)自然死 |
| Bust Hadrian Musei Capitolini MC817.jpg | [**ハドリアヌス**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%89%E3%83%AA%E3%82%A2%E3%83%8C%E3%82%B9)CAESAR PVBLIVS AELIVS TRAIANVS **HADRIANVS** AVGVSTVS  | [アエリウス氏族](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%A2%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%A6%E3%82%B9%E6%B0%8F%E6%97%8F&action=edit&redlink=1)出身。トラヤヌスの叔母である[ウルピア](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%A6%E3%83%AB%E3%83%94%E3%82%A2&action=edit&redlink=1)の孫。親族の男子として嫡男のいないトラヤヌスの養子となる。 | [138年](http://ja.wikipedia.org/wiki/138%E5%B9%B4)[7月10日](http://ja.wikipedia.org/wiki/7%E6%9C%8810%E6%97%A5)自然死 |
| Antoninus Pius Glyptothek Munich 337.jpg | [**アントニウス・ピウス**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%8B%E3%82%A6%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%94%E3%82%A6%E3%82%B9)CAESAR TITVS AELIVS HADRIANVS **ANTONINVS** AVGVSTVS PIVS | [アウレリウス氏族](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%A2%E3%82%A6%E3%83%AC%E3%83%AA%E3%82%A6%E3%82%B9%E6%B0%8F%E6%97%8F&action=edit&redlink=1)出身。ルキウス・ウェルスとマルクス・アウレリウスの後見人として即位。[トラヤヌス](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%A4%E3%83%8C%E3%82%B9)の曾姪でマルクス・アウレリウスの叔母でもある[大ファウスティナ](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%A4%A7%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A6%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%8A&action=edit&redlink=1)と結婚、[小ファウスティナ](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A6%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%8A)を儲ける。 | [161年](http://ja.wikipedia.org/wiki/161%E5%B9%B4)[3月7日](http://ja.wikipedia.org/wiki/3%E6%9C%887%E6%97%A5)自然死 |
| Marcus Aurelius Glyptothek Munich.jpg | [**マルクス・アウレリウス**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%A2%E3%82%A6%E3%83%AC%E3%83%AA%E3%82%A6%E3%82%B9)CAESAR **MARCVS AVRELIVS** ANTONINVS AVGVSTVS | アウレリウス氏族出身、叔父アントニウスの養子となる前は[アンニウス氏族](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%83%8B%E3%82%A6%E3%82%B9%E6%B0%8F%E6%97%8F&action=edit&redlink=1)に属した。従兄弟小ファウスティナと結婚して[コンモドゥス](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%A2%E3%83%89%E3%82%A5%E3%82%B9)と[ルキッラ](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%AB%E3%82%AD%E3%83%83%E3%83%A9&action=edit&redlink=1)を儲ける。 | [180年](http://ja.wikipedia.org/wiki/180%E5%B9%B4)[3月17日](http://ja.wikipedia.org/wiki/3%E6%9C%8817%E6%97%A5)自然死 |

〈パンテオン〉

　アウグストゥス帝の側近アグリッパによる建立（ユリウス氏族の栄光）

　ハドリアヌス帝による再建

　　円堂形式の神殿→一つの完結した世界としてのローマ帝国

　　天空７神をはじめとするローマの全ての神々を祀る

　ハドリアヌスの属州視察

　　帝国の安寧：皇帝に対する民衆の信頼と畏敬の念

　　　＊ヴィッラ・アドリアーナ（ハドリアヌスの別荘：属州旅行の思い出）



第１１講　地中海世界の混迷と再編

マルクス・アウレリウスは実子のコンモドゥスを後継者に指名・・・彼の唯一の誤り

コンモドゥスの暴政

〈「ローマの平和」の動揺〉

　皇帝礼拝（皇帝の神格化）と新興宗教

　五賢帝時代の終焉→アフリカとシリア人の帝室と軍隊

　　　・・・古代は今より人種差別がない。

　セプティミウス・セウェルス帝の息子、兄カラカラと弟ゲータの後継者争い

→カラカラの勝利。碑文や絵からゲータの顔や名が消される



カラカラは素晴らしい大浴場をつくった→

２１２年　**カラカラ勅令**（**全自由民**（奴隷は違う！！）**へのローマ公民権の付与**）

　　　　　《P.217　108》名誉を与えるという口実のもとに税収増加？

　　　　　第８講も参照（自由民）

　２２６年　**ササン朝ペルシア**の勃興

〈三世紀の危機〉

　　政治危機　財政危機　経済危機　社会危機

**軍人皇帝の時代**（２３５－２８４年）２６人の皇帝（元老院に認められただけでも）が

この短期間に交代

　　・辺境地帯の暗雲（ササン朝ペルシア、ゴート族の侵入）

　　・帝国内分離国家「ガリア帝国」の出現

　　・社会不安の増大→人々の生き方の変革期

　　・密議宗教

（イシス、ミトラス（女性はだめ→発展しない）、キュベレ、バッカス、キリスト教）

→諸宗教の融合、重層関係

→シンクレティズム（習合）：全く異なる、あるいは正反対な信仰を調和・調整する試み

〈危機の克服と専制君主制〉

　最後の軍人皇帝**ディオクレティアヌス**(在位２８４―３０５年)

　　・**4分治制（正帝、副帝）**軍事力の倍増　属州の細分化（１２管区への再編）

　　・民政と軍政の分離　カピタティオ・ユガティオ制（**人頭税＋地税**）

**・最高価格令**《P.226　１１３》（貨幣の改悪→物価の上昇が止まらないから）

・宗教による皇帝権の強化（ex.ペルシア風の拝跪礼による謁見）→新しい愛国心

・唯一生きたまま引退したローマ皇帝

・カエサルに匹敵するくらいの為政者であろう

　　　・・・しかしキリスト教を迫害したために悪帝扱い

☆よだん☆

正帝副帝の争いでまた軍人皇帝時代・・・？となったとき元老院の使者が引退中のディオクレティアヌスのところへいって彼の復権を願い出た。しかし「キャベツの世話で忙しい。ローマなどかまってられるか」と言われて断られたらしい。彼の潔い性格を表すエピソードといえる。

**コンスタンティヌス帝**

**・ミラノ勅令**：キリスト教の公認（３１３年）（キリストの夢を見てから？）

**・**皇帝の官吏の強化　野戦機動部隊

・**通貨改革**（solidus金貨）

　**ソリドゥス金貨**は1000年くらい地中海で改悪されることもなく長い間貨幣価値を保った。ドルを＄（＝S）と表すのはこれに習いたいという理念から。

・３３０年　コンスタンティノポリスを首都として建設

　　　　　（実際は４世紀に首都として機能）

〈世界宗教としての一神教〉

　「ローマの平和」の時代　多神教世界帝国（ｃｆ.パンテオン）

　異教世界の「みだらさ」という言説

　　４世紀（ミラノ勅令以後の時代）の史料はそれ以前の４００年間の史料の２倍も残存している。

ヘレニズム世界のシンクレティズム

　　**自分の内なる世界**を豊かにする

**ストア派**（禁欲主義？）

自然の秩序に従う生活　アパテイア（不動心）

　　**エピクロス派**(快楽主義？)

現実から離れる快適な生活→「隠れて生きよ」　アタラクシア（平静な心）

　　一神教世界への道のり「行為の論理」だけではなく「心の論理」を重視

　　３世紀半ばまで信徒は微々たる人口（**１％以下！**）に過ぎなかった

　　　　民族の限界　　ユダヤ人、ギリシア人

　　　　居住地の限界　大都市部ex.ディアスポラのユダヤ人

　　　　階層の限界　　中下層民

　　→なぜその後３～４世代間で爆発的に増加したのだろうか？・・・後述



**ユリアヌス帝**（コンスタンティヌスの甥）

・軍功をあげて人気のある皇帝

・キリスト教（権力の裏で腐敗？）より異教（古典・古代文化がある！）復活！！

・ある意味見る目があった。

・「背教者ユリアヌス」

　（しかし暴力を用いると殉教者がでる→美談でますます信仰高まる　のがわかっていたためあくまで言論で攻撃）

・ペルシアとの戦いで死亡

〈帝国の内紛と混乱〉

**テオドシウス帝**

　　　・３９１　キリスト教を国教化（異教の全面禁止）

　　　・教父アンブロシウス：テオドシウス帝に対立

キリスト教のリーダーとして毅然とした態度→認めさせる

　　　・教父アウグスティヌス：マニ教信者→キリスト教に回心

　　　　　　　　　　　　　『神の国』『告白』古代最大の教父

　　 テオドシウス帝死後の帝国の分割（395年）

　　　　　東西関係の疎遠化　西方ラテン世界と東方ギリシア世界

社会構造の変化

　奴隷制ラティフンディア→コロヌス（小作人）制（土地への緊縛度がます）

　帝国西部の土地の衰退→都市富裕民は重税を逃れ農村に所領を形成

なぜキリスト教信者は爆発的に増えた？

1. **十字架上で主が犠牲になるという物語の理解しやすさ**

生け贄の儀礼という古代人の常識《P.12》→「神の子であるキリストが十字架にかかる」

1. **貧しく抑圧された下層民の怨念**

貧者に同情する富者：福音への理解（←恵まれた者の慈愛の念、喜捨）

「貧しい人々は幸いである。神の国はあなたがたのものである」

「富裕な人々は不幸である。もうこの世で慰めに預かっているからだ。」

1. **心の豊かさを求める禁欲意識**

欲望を汚れたものとする

ヘレニズム期以来の心性の土壌とパクスロマーナ→物質の豊かさ→心の豊かさ

心の内なる世界に向かう精神

　祭礼の重視→「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くしてあなたの神である主を愛しなさい」

　「姦淫するなかれ」etc.

第１２講　古代末期と地中海文明の変質（４～７世紀）

東西ローマ帝国への分裂

　西ローマ帝国（ローマ中心）と東ローマ帝国（コンスタンティノ-プル中心）

（経済力の重心は東へ）

　　・西ローマ帝国

　　　ゲルマン人諸国の乱立

　　　　西ゴート族（イベリア半島）　ヴァンダル族（北アフリカ）

　　　　ブルグンド族（ガリア中部）　アングル族とサクソン族（ブリタニア）

　　　　［フランク族（ガリア北部）　ランゴバルド族（北イタリア）］

　　　滅亡（476年）　**オドアケル**による西ローマ皇帝の退位

　　・東ローマ帝国

　　　・都市の繁栄：首都を中心に活況→ヘレニズム期からの都市の繁栄

　　　・**ユスティニアヌス帝**の時代（６世紀）

　　　　地中海世界の再統合・・・帝国領の大半を回復

　　　　『**ローマ法大全**』の編纂（トリボニアヌスなどに命じる）

　　　・帝国勢力の交代（６世紀以降）

　　　　スラヴ人の移住　アヴァール人の侵入　ランゴバルド王国の台頭

古代後期・末期は「衰退」「没落」の時代か？

→否（むしろ**新しい価値観を創造する時代**としてピーターブラウン（『古代末期の世界』）などが１７世紀から再検討。（＊））

　　　ギボン『ローマ帝国衰亡史』

　　　　〈ローマ帝国の死因〉

　　　　　没落外因論　他殺説（ゲルマン人による）　天災説（気候変動）

鉛の弊害（水道管が鉛製→不妊）

　　　　　没落内因論　病死説（がん細胞＝キリスト教　脳卒中＝軍事力）

　　　　　　　　　　　カロリー不足（奴隷など人的資源の不足）

　　　　　　　　　　　骨格のひずみ

（社会経済構造の問題：

奴隷の供給に依存

優秀な人材がキリスト教界に集中―がん細胞説に通じる

属州に自立的経済―イタリア半島とその周辺部の力↓）

没落自然説　老衰説（そもそも文明にこれほど多くの死因を考えられること自体）

（＊）およそ２００－７００年の地中海世界

社会・文化における変化

　古代末期の世界は古典古代文明とは明確に異なる新しい世界

西ヨーロッパはカトリック

東ヨーロッパではギリシア正教

西アジアではイスラム教

の世界（10講冒頭部分も参照）：多神教の否定「唯一の創造神」

　　　　同時代性

　　　　　新しい抽象芸術（古典期の写実風とは異なる単純化された作風）

「今私は我々の内にある神的なものを万有の内なる神的なもののもとへ上昇させるように努めている」

古代末期の心性「禁欲の心性」・・・初期キリスト教

　　　　　　キリスト教公認後の**世俗化に対抗**して・・・

　　　　　　　**修道士**（特に荒野の修道士（原型はキリスト））、聖人

　　　　　　　　　　　　・アントニウス　修道者の開祖、隠修士

　　　　　　　　　　　　・マカリウス　 厳しい禁欲

　　　　　　　　　　　　・シメオン　　 １６ｍの高い柱に上って修行したとか

　　　　　　　　　　　　　　　　　　 死後その場所に教会が

 批判：宗教・文化の面に限られ経済・政治面での根拠はない

　　反論：新しい支配階層の出現（４世紀半ば～２世紀間は続く）

　　　　Raparatio Saeculi（**回復の時代**）・・・という言葉が貨幣、碑銘に刻まれている

　　　　華麗なモザイク（北アフリカやシチリア島）

　　　　大地主のdolce vita（甘い生活）

　　　　　・・・などから何かしらの変化はあったに違いない！

　今や**「衰退・没落史観」によらない「古代末期の世界」は主流！**

　　「ポスト・ローマ期」という考え方

　　　西方世界（特にガリア中心）

　　　　元老身分のセナトール貴族が司教権力として民衆を掌握

　　　　　Exメロヴィング朝フランク王国のキリスト教への改宗が行われたのも

　　　　　　 彼らの支持を得るため

　　　　・・・がユスティニアヌス帝の進出により没落

　　　東方世界

　　　　教会と貴族

　　　　 教会と貴族・・・大土地所有制＋官僚制による帝国・都市貴族の支配

　　　　 イスラム勢力勃興後は東ローマの領土喪失で勢い↓↓

☆試験☆６０分

・ギリシアにおけるポリスの成立と発展についてオリエント世界との異同を考慮しながら論じなさい

　ポイントだけ補足すると

ポリスは特定の地域内の村落や町の人々が政治軍事祭儀の面で共通の中心をもちその団体が独立して行動していればそれでポリス。

＝民族としては一体でも政治的には独立、王がいない　小王国の分立から始まった

→しかし中央集権国家に飲み込まれていく

オリエント：中央集権国家　王がいた

　　　　　みたいなことに肉付けしてください。

・ローマ皇帝権力とはどのような特質を持っていたのか、形式上と事実上の区別をしながらまたとりわけ『新皇アウグストゥス業績録』に注目しつつ論じなさい

　シケプリ23ページ

おわり。最後に一言。

私がこの大学に入る動機の一つとなり、今回の授業で学ぶのを楽しみにしていたポンペイ**だけ**がなぜか試験範囲から外されたのはテンション下がりました（T\_T）

つかれた・・・ぱたり。